とある使用人の1日。

道央花子

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゾルディック家の使用人の１人を妄想。

オムニバス形式で時系列は考えていない夢小説です。

書いている人間はＢＬＮＬＧＬ雑食ですので、文章ににじみ出るものがあるかもしれません。ご留意頂ければ幸いです。

※２０２２０３０５シリーズってことで短編から連載状態へ、かつ完結済みにしております

目次

番外：クロスオーバー・鬼滅の刃　1
ゾルディック家の使用人のある日オムニバス1　14
ゾルディック家の使用人のある日オムニバス2　22
ゾルディック家の使用人のある日オムニバス3　29
ゾルディック家の使用人のある日オムニバス4　42
ゾルディック家の使用人のある日オムニバス5　51
ゾルディック家の使用人のある日オムニバス6　58
ゾルディック家の使用人のある日オムニバス7　69
ゾルディック家の使用人のある日オムニバス8　76
ゾルディック家の使用人のある日オムニバス9　86
ゾルディック家の使用人のある最後　91
とある使用人の没集　96

番外：クロスオーバー・鬼滅の刃

先日鬼滅の刃のアニメ見ました。漫画の方も金が出来たら購入してみようと思います。

てくらいにはおもしろかったです。

どちらかと言うと念能力イコール血鬼術の方が納得出来たので、シミズには鬼になって貰っています。

ーーーーーー

悲鳴が、雷鳴が轟くそんな夜。

膝を抱えて震える少年に、親と呼べるものは無かった。

先の戦争でそんな子供掃いて捨てるほどいた。弱ければ飢え死に、強ければ飯が食える。

飢えは思考を本能的にして、少年の今世の記憶を簡単に飲み込んだ。幸せだったのかもしれない。不幸だったのかもしれない。しかし今はただの獣だった。

覚えているのは真っ赤な目がこちらを見ていたことだけで。

「ーーーーーー」

絶叫の渦の中、鬼舞辻無惨の血を分け与えられた少年シミズは周りの子供を食らった。やがて満腹になるとその小さな体をしならせて、闇に消えた。

「うーん？」

意識が浮上すると、シミズの意識は前世ゾルディック家の使用人をしていたものになっていた。

見渡せばそこはゾルディック家の庭を思わせる鬱蒼とした森。季節は冬なのか、深く雪が積もっていた、そこで唸る一人の少年名をシミズ。奇しくも今世の名もシミズであったが、それを伝えるものは深い森の中においては1人もいなかった。

暗殺者として鍛えたはずの様々な欲を抑える術を、まるでなかったかのように感じる空腹に、シミズは首を傾げていた。他の欲に関しては抑えられているのにも関わらずである。

そんな疑問を抱えたまま、シミズは何故か全身についている血を蛆達に食べてもらおうとオーラを伸ばす…と、伸ばせなかった。

「あれ？…あ、ええ？」

息をするように出来たそれが出来ない事に困惑するシミズ。よくよく見ればその体

は小さく、自分が仕えるゾルディック家の三男坊くらいの大きさだった。
「…ま、いっか」
いくら考えても好転しない状態に見切りをつけ、周りの気配を探り修行を始めたシミズ。
そのうちに、自分が日光に当たれないことを本能的に理解した。何故分かるのか、疑問に思ったシミズは様々な方法を試した。瞑想していたある時、何かを感じその何かに触るイメージを練っていくと、ふつりと何かが切れた感覚に疑問が解消した。
「あー操作系の念か…気がついたら外れる感じなのかな、それとも俺が外そうとしたからかな。特に害は感じなかったし、脳を操作して伝達する感じかな。ま、スッキリしたからいいや」
しかし日光に当たることに対する怯えは消えず、これはオーラで体を強化することで解決出来るのではないか、と考えたシミズは、さらに修行をした。
何時間体を動かそうと全く疲労を感じない、睡眠すら必要としない体を嬉しそうに動かしていたシミズは、何時間いや何ヶ月か何年か、とにかく長い時間がたった時ふと、自分の体からオーラが吹き出しているのを見た。
「やっとかぁ…さぁてたまごちゃん達を見つけよー」
オーラさえ身にまとえればほぼ記憶のままにあつかえた。

しかし体が小さいゆえ、技術はともかくオーラの量は足りず歯がゆい思いをしながら森を歩いた。

雪の積もる森とはいえ、木の皮の間などに虫はいる。歩きつつ、気になった樹皮を剥がし時に雪を掘り、数個の蝿の卵を手にし、その他は蛆まで育ててから咀嚼し森をさまよう。

途中日光に当たったが、やはりオーラで防ぐことが可能だった。

「しかしまーやっぱり俺キルア様の才能に比べたらクソだなーねーたまごちゃーん」

そんなことを極小さい蝿の卵に向かって呟きながら、当てどもなく歩いていると、刀を持った派手な羽織の男に立ち向かう少年がいた。

派手な羽織の男の腕には可愛い女の子がいた。どうやら走り回る少年の大事な人のようなので、少年に加勢してやろうとシミズは動いた。

「こーらー女の子に乱暴しちゃダメだよー」

突然の乱入者に炭治郎は驚いて固まる。

冨岡は一見して子供であるシミズの動向を油断なく伺うが、にこやかなその顔に嵌っている一対の眼球、その動向が真っ赤であり、シミズが鬼であると悟った彼は内心焦りを感じた。

外見は子供とはいえ、感じる圧は師である鱗滝左近次のそれに近しい、上位の存在で

あるそれだったからだ。
「無視はよくなーいよ！」
シミズが冨岡の肩に手を伸ばすと、その手は空を切った。冨岡はシミズの手を避け、距離をとったのだ。
その隙に禰豆子の側へ行く炭治郎を庇うようにシミズが位置どった。
と、同時に先程冨岡が立っていた場所に斧が到来し、木に刺さる。
「っ…」
「君、女の子を虐めてどういうつもりなのー。モテないよーそういうことすると皆に嫌われるよー」
冨岡がなにやらモゴモゴと言ったあと禰豆子に指を指し、人間の女であればともかくそれは鬼だといった。
シミズは首を傾げる。
「鬼だと何か都合が悪いの」
「鬼は人を食う無差別に」
「へー」
「そしてその赤い目、お前も鬼だ」
「ほぁ？」

シミズは間の抜けた声を出した。禰豆子は立ち上がり、炭治郎を冨岡から庇うように立っている。そしてその前にはシミズがおり、冨岡は内心妙な気持ちになった。
「うーんでもほら、俺角も牙もないし人も食ってないよ?」
「ね、禰豆子も!妹も人を食ったりしません!これからもさせません!!」
「ほらー、この子もそう言ってるしさー問答無用で殺そうとするのどうなの」
しまってしまって、と納刀させるようにシミズは促すが冨岡はついぞそれをしなかった。

ーーーーーー
「あの、シミズさん」
「うん?」
「シミズさんはなんで陽の光に当たっても大丈夫なんですか?」
鱗滝左近次の住まいのある山のなか、炭治郎はシミズに声をかけた。
「うーんとね、こう、オーラをね」
「おーら…?」
「説明難しいやとりあえず透明な煙みたいなのを体から出してそれで守ってる感じ。常に」

大きな岩の前、炭治郎は両断すること叶わず様子を見に来たシミズに日光を克服する術を尋ねていた。
「禰豆子にも出来るでしょうか」
「んー出来ると思うよ。ただ妹ちゃん眠っちゃってるしねぇ？」
「そう、ですよね」
「教えてあげたとしても俺みたいにずっとやる為には訓練が必要だし」
炭治郎は少し考えたあと、訓練に戻ることをシミズに伝え型を最初からやり始める。
それをぼうっと眺めて飽きたのかシミズは山をおりた。
陽光降り注ぐ山の浅い場所に来ると、昨日お肉を頂戴したウサギの骨を吊るしておいたそこには蛆が沢山湧いていた。シミズは鼻歌まじりにそのさまを見つめ、気に入った蛆を摘んで懐に入れた。
見た目が子供なのでまだ許されるが変態である。
「ふんふふーん」
「…」
「なぁんです。鱗滝さん、そんなに俺を見つめちゃって」
鱗滝左近次とは炭治郎と共にこの狭霧山に来た際に一悶着あったが、今では茶飲み友達のようなものだと、シミズは考えていた。

「鬼舞辻無惨はおそらくお前を狙ってくるだろう」
「はへ？」
「陽の光の克服、それをなしたお前のその能力を我がものにしようとするだろう」
「へー…鬼舞辻さんてぇ、どんだけ自分で努力しないんだろねぇ？頑張れば誰でも出来るのになぁこれ」
「……謁見の許可が降りた。屋敷の場所は秘匿されている故、目隠しのうえ拘束させてもらう」
「殺すとかじゃ無ければいいけど」
「私は殺さない。もはやお前には情がある」
　情があると言われて少しばかり喜色ばんだ顔を見せたシミズだったが、引っかかるものを覚えたため、形容しがたい顔になった。
「えっじゃあ他の人はやばいの」
「…」
「あちょ無言でにじりよらないでっあっーいやー！炭治郎くん助けてーオカサレルゥー生命をー！」
　数時間の追いかけっこの後、それに飽きたシミズが自ら捕まって終わった。
「あれー？鱗滝さんが運んでくれるわけじゃないんだねー」

簀巻きにされ目隠しをされた状態で担がれたシミズ。感じるオーラからしても蛆達の位置関係からしても担いでいるのは鱗滝ではないと断じ、またねー鱗滝さんなどと気の抜ける挨拶を残し、シミズは狭霧山を後にした。

ーーーーーーーーー

「シミズと言ったね」
「はい。シミズです」
「漢字はどう書くのかな?」
「カタカナっすね」
「珍しいね苗字がカタカナとは」
「いやこれ名前です」
「そうなのかい?」
「そうですよ自分で適当に付けたので」
「辛くは無かったかい」
「ないないなーいですよ。弱肉強食は世の理、なんなら今そっちで怖い顔してる傷だらけのおにーさんやらハレンチな格好のおねーさんに殺されたって恨まないです。おまんまくえて、寝るとこあってついでに女をだければもう幸せじゃないですか。まだ精通

来てないんでしてもいまいち楽しくないでしょーけど」
「そう」
「それよりー鬼舞辻さんがー俺を狙ってくるそうなんですよーだからーご飯をくれたらおとりやってもいいですよ?今回俺を呼んだのはそういう御用時ですよね」
「…ご飯は、何が好きかな。できる限りを用意しよう」
「食えればそこら辺の草でも小魚でも全然ＯＫです!選り好みしてたら生きてかれないですから」
「人を食いたいとは思わない?」
「思わないですねー、食いではありそうですしむかーしもっと子供の、鬼になる前なんですけどその時食べるものなくてそこらに落ちてた赤ちゃんの死体食べた時、まーろくなもん食ってなかったんでそれなりに美味しかったんで食べられるとは思うんですけど、でも
　その後吐いちゃって、トラウマなんですよー」
　縁側に座って顔の上半分に火傷みたいな痕をもつ産屋敷耀哉なる青年と、見た目は子供発言は狂人のシミズの会話を砂利の敷き詰められた庭で聞く柱の面々。
　今にも斬りかかりそうな雰囲気の男はハレンチな格好の女性に止められていた。
「食事を用意するよ気に入ったら協力してくれるかい」

「いいともー」

ーーーーーーーーーー

「わぁ、鬼舞辻無惨さんとってもいいお声ーシルバ様に引けを取らないねー」

少年の姿のシミズは、鬼舞辻無惨に向かってそう言った。柱以下鬼殺隊の面々が2人の周りを囲み、何が起きても対応できるよう油断なく構えている。

「陽の光を克服したら全能の存在になれるとか無いですからまじで」

「鬼狩り共と手を組んで何を企んでいるかしらんが、お前と違って私は完璧なんだよそれさえ克服できれば」

「へぇ」

「がはっ」

なんの前触れもなく、鬼舞辻無惨は倒れ伏した。

「さぁ、蛆ちゃんご飯だよ」

ぷちぷちと鬼舞辻無惨の体に水膨れの様なものができ始め、そこからボトボトと蛆が出てきた。

「いやぁあああ!!」

絹をさくような声に汚い高音が混ざって悲鳴の大合唱だった。
「貴様…っだ、なに〝を…」
「うんとねー、何かほら首を切っても死なない鬼ーさんいたじゃないですかーじゃあー首魁の鬼舞辻さんもそーじゃないかなーって思ってー」
「ぐっあぁっ！」
「どうですー？生きたまま中から外から食べられる気持ちはー」
「なぜっ」
「呼べないですよね何も出来ないですよねオーラで貴方を包んでいるからですよ。俺の術中にはまれば何人たりとも俺のかわい子ちゃん達のご飯だよ」
「つくっそぉ〝…訳の分からないことを…」
「蛆ちゃん達は腐ったものがだーいすきなんだよー鬼舞辻無惨さんはー程よく腐っててておいちーおいちーって喜んでるよ」
「…っ…ぅ」
「さよならー」
後に残ったのは1匹のハエだけだった。
「終わったのか…」
「やぁ、産屋敷くん」

「やぁ、シミズくん。約束を果たしてくれたね」
「約束は守るよ。信用第1だからね。美味しいご飯をありがとうございました」
「ふふ、どういたしまして」
「産屋敷くん、俺はこれから殺し屋さんやるから、また何かあったら呼んで。定住したら教えるから～」
シミズは目にも止まらぬ早さでその場を去る。
その後、シミズの姿を見たものはいなかった。

ゾルディック家の使用人のある日オムニバス

ある日1―

とある山道。
男はただ歩いていた。
程なくして歩き着いた先には大きな門。そこにはバスが一台と十数人の男女。
ここは、観光地として有名なククルーマウンテン。殺し屋1家ゾルディック家の屋敷の前である。
この大きな山が丸ごと敷地のうえ、殺し屋家業であるにもかかわらず隠れ住むこともせず居を構えている様は観光しうるものなのかもしれない。
屋敷の前、とは言うがこのそびえ立つ門の外から屋敷は見えず、観光客もただその門だけを見て肝を冷やす。
怖いもの見たさとは言え命は惜しいのだろう。
「あー!あんた危ないぞ!」
そんな叫びが聞こえていないはずもないのに、男は門へ近づいていった。

「お疲れ様ですゼブロさん」
「あぁ、シミズくんお疲れ様！観光バスが帰るまでお茶でもどうだい？」
「助かります。あまり見世物になるのは嬉しくありませんので」
男ーシミズーは門の壁に作られた小屋へ足を進め、そこに座り観光客をまるで孫でも見るような顔で見ている老齢の男に声をかけた。
狭い小屋の中、ゼブロと呼ばれた老齢の男は立ち上がり、湯呑みにポットから茶を注ぎテーブルに置いた。
程よい温度の液体は淡い黄緑色で、恐らくジャポンの緑茶であると見受けられる。
「ふぅ…私ももうすぐお払い箱かも知れませんね」
ゼブロは独り言のように視線をさ迷わせて再びもとの場所へ座った。
「ゼブロさんがお払い箱になったら自分がここに収まろうかと、考えます」
シミズは湯呑みに口をつけ、一息ついて外を見た。
ガラス越しのそこにはバスを見送る数人の男。
「シミズくんは本邸の使用人じゃないか。あと３０年はこっちに寄越して貰えないよきっと」
やれやれ、と立ち上がったゼブロは小屋を出て外の男たちの方へ向かっていった。
シミズはその背中を見ながら、少しばかり薬臭い茶を啜った。

ーーーーーーーー

ある日2

「なーシミズー」

巨漢がシミズを呼ぶ。

巨漢の名前はミルキ・ゾルディック。ゾルディック家の次男だ。

「如何致しましたかミルキ様」

シミズは掃除の手を止め、ミルキを振り返った。

「ゲーム付き合え」

「かしこまりました」

ミルキは典型的なオタクである。

画面の向こう側の人間と通信対戦できるゲームも好きだが、オフラインのマニアックなレトロゲームも好んでいる。

コンピュータ相手ではある程度パターンの予測が出来るためつまらないと、こうやって使用人に声をかけるのである。

「あっ！お前手ぇ抜くなよ！」
「申し訳ありません」
「ったくよー！次手ぇ抜いたらお仕置きだかんな！」
「承知致しました」
お仕置きとは、ゲームやアニメーションのキャラクターフィギュアを作る時のモデルになることである。それも悪くないと、シミズは思っている。この暗殺一家の使用人としてはそんな温い仕置で済むのならいくらでも、である。
「あっあっあー！！クッソ死んだ！なんでお前そんな強いんだよ！」
「昔取った杵柄、という所でしょうか」
シミズはすました顔でそう言った。

ーーーーーーーー

ある日3
イルミ様は好き嫌いがないので楽だ。
食事を提供するシェフがそう言う。
しかしそれは間違いであると、シミズは思う。

「本日のメインでございます」
　このゾルディック家で振る舞われる料理には様々な毒薬が入れられる。毒への耐性をつける訓練の一貫だ。
　シミズは料理を運び終え、壁際に立ち一家が食べる様子をそれとなく伺う。
　ふと、今日の毒は何系統だったかとシミズは思い浮かべた。
「（あぁ今日はアレだ）」
　シミズはそっとイルミに視線を向けた。顔が見えると微かにいつもより口が引き結ばれている。
　耐性は出来ていても、味の好みは残るらしい。弟達の手前表に出しはしないのでシェフは気が付かない。
　シェフは一応毒の味も加味して料理を作っているはずだが、どうもある毒の味が苦手のようだ。
　シミズは使用人のなかでは恐らく自分だけが気がついているのではないかと、密かに優越感に浸った。
　執事のゴトーがイルミの好き嫌いにシミズよりうんと前に気がついていた事を数年後知ることになる。

「俺に勝てると思ったのか？」
「……ひとつくらい…」
「ないな」
項垂れるシミズを一蹴し、優秀な執事は業務をこなしに消える。ついこの間執事見習いから昇格したカナリアはその光景に堪えきれず笑った。
ーーーーーーー
ある日4
使用人シミズはとある街に来ていた。
「お仕事中失礼致します。お話を聞かせてください」
街の路地裏、一体のギャングをとりしまる若い男に声をかけると、沢山の小さい人影がシミズを取り囲む。
「何の用だ」
「言葉通りです。意味がわからないのであれば噛み砕いてお話することも出来ますが…いかが致しましょうか」
慇懃無礼に言い放つシミズに、色めき立つ子供たち。
「意味はわかる。話をするのは構わないが」
男はシミズに向かって親指と人差し指で輪を作って見せた。

「報酬はこれでいかがでしょうか?」
「いいだろう。それで?何が聞きたい」
旅行カバンにいっぱいの札束を確かめた男はシミズに話をうながす。
「こちらの男性の行動パターンを知りたいのです」
「……参考までに聞いてもいいか」
男は清水が差し出した写真に写る人物を知っていた。
「なんでしょう」
「この男をどうするつもりなんだ」
「殺します」
シミズの言葉を合図に、男と囲んでいた子供たちはシミズに飛びかかった。
しかし、彼らはシミズに指1本触れることなくくずおれる。
男を掴みあげ、無理やり目を合わせたシミズは静かに怒っていた。彼は予定が狂うのを酷く嫌う。
「行動パターンを教えていただけますか」
「死んでもごめんだ」
シミズはため息をつくと、男に1本針を指した。
「シミズお前遅いよ」

「申し訳ございませんイルミ様。お時間を頂いたのにも関わらずこの体たらく…如何様にもご処分を」
「お前を殺すとミルキがうるさいから今はやめとく」
「感謝致します」
「ん。まーとりあえず仕事の時邪魔が入らないようにだけはしといて」
「お任せ下さい」
シミズは深く頭を下げた。

ゾルディック家の使用人のある日オムニバス２

ある日５

「キルア様、朝でございます」

今日の使用人シミズはゾルディック家現当主シルバ・ゾルディックの三男であるキルアの世話を担当する。いつもの担当者が不在のためだ。

「ん～あとごじかーん」

「１２歳のキルア坊っちゃまは布団に描かれた黄色い大陸のことを覚えてらっしゃいますでしょうか」

「シミズ…お前ふっるい手を使うなよな」

「おはようございますキルア様」

「…様はいらねーって」

「それはご命令でしょうか」

「もういい」

キルアは俯き部屋を出ていった。

「さて、さすがにもうおねしょはなさらないようですが…これはチョコロボくんの残骸

…」

シミズがシーツを持ち上げると、ぱらぱらとチョコ菓子の粉が落ちる。シーツに所々茶色い跡が残っている。

これは担当者の怠慢か、はたまたキルア坊っちゃまの食べ方の問題か…と、シミズは目を細める。

「あ！シミズ母さんにチクるのはダメだぞ！これは命令だかんな！」

キルアは何かを察したのか、さっと部屋に戻り言い放つとまた部屋を出ていった。

「申し訳ございませんキルア様。キキョウ様からのご命令を上書きすることは出来ません」

キルアの背中にシミズはそう声をかける。

「シミズのけーち!! ハゲろ！」

シミズはそっと自分の頭を押さえた。

ーーーーーーーーー

ある日6

「おい」

「はい、なんでしょうか」

執事のゴトーはシミズの上司である。
歳はほとんど同じだが、技術はゴトーに勝るものは今のシミズにはない。ひとつを除いては。
「掃除」
「承ります。帰りの足はありますのでゴトーは先に帰ってもいいですよ」
シミズがおもむろに手を開くと、手のひらには無数の虫がいた。
「どうせ５分もかからないだろう」
「まぁそうなんですけどね」
虫はシミズの意志を汲んだように、床にとびちった人間だったものを貪り食う。
「相変わらず悪趣味な能力だな」
ゴトーは無感情にその光景を見やった。
虫は肉片を食べては卵を産み、その卵は瞬く間に孵化し成長過程でまた肉片をたべる。
加速度的に肉片はなくなっていく。骨すらも肉片より幾ばくかかかってはいたが、姿を消した。
「悪趣味とはいいますけど、自然の摂理ですよ。私はそれを少し早めているだけです」
虫は肉片を食い終わると、共食いをはじめた。

最後の1匹になると、シミズの手のひらに戻りその羽をたたんだ。
シミズはその虫を握りつぶし床に捨てた。
「証拠を残すなよ。一片たりともだ」
「ええ、もちろん」
床に捨てた潰れた虫から無数の卵が広がり、卵から孵った幼虫が部屋に四散する。
「今から匂いの元と…目撃者も始末しますね」
ガタンっと部屋の天井から何かが落ちてきた。
「賞金首ハンターか」
「おそらくは。しかし私程度に殺されるのですから3流ですね」
「フンッ違いない。さっさとしろよ」
ゴトーは唯一虫のはっていない入口のドアに背をもたれてシミズの虫が働くのをただ見ていた。
ーーーーーーーーー

ある日7
(注意・虫食、蛆虫の描写あります)
執事見習いのカナリアは、まだ腫れの引かない患部に軟膏を塗っていた。

念能力を使えても未だ半人前の彼女は生傷が耐えなかった。
「マゴットセラピーって知ってる？」
カナリアが手当を行う傍らで、羽音をさせている袋を持ったシミズがなんの脈絡もなくそういった。
シミズにとってはあるのかもしれないが、カナリアには想像がつかなかった。
「マゴットって、蛆ですよね？セラピーってことは…」
多岐にわたるゾルディック家の仕事場、それに合わせて多言語習得は執事、使用人の必須条件だ。
「知らない感じ？」
「…シミズさんってゴトーさんにも敬語なのに私には崩しますよね」
「んー…今休憩中だから崩してる。休憩中はゴトーにも、こうやって話すよ？」
シミズは手に持った袋から羽音がしなくなるとそっと開いた。中には白く小さな幼虫がビッシリといる。
「ひぃえ」
「あれ？もしかしてカナリアって流星街出身じゃなかった？」
「馬鹿野郎」
シミズにゴトーの拳が振り抜かれた。

「ゴ、ゴトー…痛い…」
「てめーの能力で操作された虫なんか恐ろしくて食えるか」
ゴトーとシミズのやり取りに、カナリアが震える。
「た、たべ…？」
「貴重なタンパク源なのにい…俺弱かったし…」
殴られたのにも関わらず、しっかりと握った袋を大事そうに懐にしまい、シミズは項垂れた。
「その締りのない喋り方もやめろ」
「仕方の無い人ですねゴトーは」
ゴトーに睨みつけられると、シミズは肩を竦めて口調を正す。
「あ、あの…それでマゴットセラピーって結局なんだったんですかシミズさん」
カナリアは2人の様子にヒヤヒヤしながら、話題を戻した。逸らした、と言ってもいいかもしれない。
「あぁ、治療法のひとつなんですよ。蛆って腐って柔らかくなった肉だけを食料にしますから、壊死した部分を食べて除去してくれます。無菌状態で育てた蛆を患部に数十匹塗布し、空気を通すガーゼで塞ぎます。さらに蛆の…」
シミズは自分が口を開く度に青くなるカナリアの顔をみて話を中断した。

「ちゃんとした治療法なんだけど、無理そうだね」
「お前は試したかっただけだろうが」
また、ゴトーの拳が振り下ろされた。

ゾルディック家の使用人のある日オムニバス3

ある日　8

シミズはその日休暇だった。

「ハンター試験受けて」

「かしこまりました」

ゾルディック家長男イルミに言われたシミズは、深々と頭を下げたが、突然の事で頭が働かなかった。

「詳細をお聞きしてもよろしいでしょうか」

「仕事で必要。俺も受けるから。合格して」

シミズは休暇中ゆえのラフな、言ってしまうとだらしない格好でイルミの答えを聞いた。

「申請はお済みですかイルミ様」

「しといて。ギタラクルで」

「かしこまりました…」

シミズは1分で着替えて電脳ページをめくった。

ハンター協会…ハンター試験…申請…

めくれば申請書がすぐ出てくるのはいいが試験会場までの詳しい道のりはない。探すところからハンターの資質を試しているということだろう。

「申請は終わりました。試験はザバン市にて行われるとのこと、詳しい場所を探すことが受験の最低条件のようです」

しかしシミズの後ろにいたはずのイルミは既におらず、シミズは1人うなだれた。

「手当出るかなぁ…？」

ある日9

「ハンター試験？シミズ君が？」

「そうなんですよゼブロさん」

ハンター試験へ出立の日、イルミは既に旅立ちシミズも門の前までやって来ていた。

イルミは変装するのにそのままのシミズがいたら同業者にバレかねないなら、と言う理由で別行動だ。

「私も変装するという選択肢はイルミ様にはなかったようです」

ゼブロは困ったように笑い、いつかのように茶を進めた。しかし、シミズは首を横に振り立ち上がる。

「ありがとうございます。でもそろそろ飛行船の時間なので」
小屋から出ると、シミズの身体全部を覆うように無数の蝿が現れた。それらはざわざわとシミズの体の上を脈動のように蠢く。
「行ってらっしゃいシミズ君」
「行ってきます」
シミズが小さく身震いすると、それまで全身をおおう波のようだった蝿達がシミズの背に集まり、黒い羽のようになった。
その黒い羽を広げ、シミズは空へ舞い上がり、丁度上空を飛んでいた飛行船の上に消えた。おそらく飛行船の上を乗り継いでザバン市に行くのだろう。
「普通の蝿はあそこまで高く飛べないんですけどねぇ」
ゼブロは1口茶を啜って呟いた。

ある日10
飛行船の上を乗り継いで、シミズはザバン市まで来ていた。
ハンター試験を受けるのだろう明らかにカタギではない様子で、しかし大人しく優男について行っている男がいた。の後を追って行くと男は食堂に入る。それからしばらく観察すると、何人もそういう人間が入っていく。どうやらそこがハンター試験会場の

ようだ。
　何人目かの男の後をおって店に入ると、その男は奥に案内されるところだった。
　シミズはそっと席に座り普通に注文した。そうしてるうちにまた、受験生らしき人間が。
「いらっしゃい」
「ステーキ定食」
「焼き方は」
「弱火でじっくり」
「奥に入んな」
　そして奥に消えてもステーキ定食が運ばれることはなかった。
　数人同じ言葉を聞くと、なるほど合言葉なんだなとシミズは内心頷いた。人差し指を立てるポーズも必要なのだろうと当たりをつけたシミズはしばらくまともなものは食べられないだろうと思い、食事を楽しんだ。
　食事を取り終わると、シミズは人差し指を立て店主に声をかける。
「ステーキ定食」
「…焼き方は」
「弱火でじっくり」

「奥に行きな」
「あ、お会計先に済ませます。ご馳走様でした。美味しかったです」
「金はいらねぇよ。ハンター教会からたんまり貰ってるからな」
「そうでしたか。それでは失礼します」
奥に入ると、部屋に案内された。外からは分からなかったが、どうやらエレベーターになっているようだ。
ドアが空くと数百人の老若男女達がいた。ギタラクルに変装したイルミの姿もある。
そして何故か、家出中のキルアまでもがそこに居た。
「キルア様！斯様なところにいらっしゃるだなんて…！」
「ゲェッ！シミズ!!なんでここに!!」
「それはこちらのセリフですキルア様！」
「お、俺は暇つぶし…」
「はぁ…とにかく1度お帰りください…」
「ヤダね！べーっだ！」
「キルア様!!」
キルアが人混みに紛れて逃げるのを追いかけるシミズ。追いかける途中にイルミとすれ違う。顔は変えているし、キルアは気が付かず通り抜ける。

「いいのですか」
　すれ違い様シミズはイルミに問う。
「良いよ今はこっちが優先」
　シミズは頷き、歩みを早めキルアの腕を掴んだ。将来有望とはいえ、念能力の使えないキルアを捕獲するのはさほど難しくなかった。
「キルア様。私はハンター試験を受けねばなりませんから、今はお送りできません。ゴトーを呼びますか？それとも私と共に試験をお受けになりますか？」
「っ…ゴトーはヤダ！」
「それでは一緒に試験を受けましょうね、キルア様」
　シミズは内心ゴトーに勝ったと浮かれていたが、表情には出さずキルアを抱き抱えた。
「おろせよ！恥ずかしいだろー！」
「そうですか？逃げないと仰るのであれば下ろします」
「逃げねーよ！」
　シミズはキルアを離し、目線を合わせた。
「それで？俺を探しに来たわけ？いや、それはこちらのセリフってことは特定してきたわけじゃないんだよな」

「左様でございます。仕事で必要になりまして、イルミ様に命じられ資格取得に参りました」

２人の様子にハンター受験者たちがざわめく、子供と見た目はたんなる優男のコンビに場違いだと言う声がどこからともなく聞こえた。

ある日11

シミズが躍起になってキルアから近況を聞き出さんとしていると、ずんぐりむっくりという形容詞が似合う中年の男が２人に声をかける。

「よぉ、あんた達新人さんだろ」

新人潰しの異名を持つトンパである。

シミズは頭の中で過去のハンター試験のデータをけんさくする。出てきたのは過去に数十回もの試験を受けている男の顔だ。

「あなたは?」

「俺はトンパだ」

「シミズと申します。その口ぶりからするとあなたは複数回お受けですか」

「まーなハンター試験に関しちゃベテランだ。なんでも聞いてくれていいぜ新人くん！これはお近づきの印に…」

「結構でございますトンパさん」
「えー俺喉乾いたー」
「ダメでございます。新人潰しに関わっては坊っちゃまの今後にどんな悪影響があるか…すぐさま離れましょう坊っちゃま」
「お、おいまてよ言いがかりはやめ…」
トンパがシミズの肩を掴もうとすると、その体は高く飛んだ。幸い天井までは高くぶつかりはしなかった。
落ちてきたトンパの胸ぐらをつかみ落下を止めると、トンパがもったままのジュースの缶を手刀で切り手に掴むと、トンパの開いた口にその手ごとねじ込んだ。
シミズは表情を変えぬまま笑う。
「ははははさすが何回も試験を落ちる人は馬鹿さ加減が違いますね。いいですか？貴方をまだ殺してないのは、貴方を殺しても一銭にもならないからです。意味がおわかりになりますか？」
「は、はひぃ…」
トンパの返事に答えるようにシミズが手を離すと、トンパはその場にヘタリ込みガタガタと震えるだけになった。
ぺろり、とシミズは手に着いたジュースを舐め顔をしかめる。

「なーシミズー」
「あの下衆の用意した下剤、市販の3流品ですよ…私が用意しましたこちらのリンゴジュースはいかがでしょう」
「えーオレンジの気分だったのにぃー」
「試験後ご用意致しますから…」
「絶対だかんな」
「はい。素直に屋敷にお戻りいただけるようで何よりです」
「はっ?!ちっげーし!なんでそーなんだよ!」
「屋敷のジュースの方が味も質もよろしいじゃないですか」
清水はニコリと、口角を上げた。

とある日12
「ウソォ?!」
少年ふたりの声が重なる。
たしかにシミズの目から見てもレオリオなる人物は歳かさに見えた。
しかしその中身は若者らしく純粋なようだった。
レオリオとクラピカ両名から離れ、キルアとゴンとなのる少年の後に着いて走ってい

たシミズだったが、レオリオとクラピカの話は聞こえていた。
　正確には空気の振動で蝿の羽が震えることを利用しての盗聴である。
　叫んでいたのは否が応でも聞こえた。絶対ハンターになるという意気込みは買うが、絶対的に体力が足りないな、と再度レオリオを追い抜いたシミズは思った。
「そういやシミズさー」
　そんなことを考えていたシミズの意識はキルアに話しかけられてすぐさまそちらに向いた。ゾルディック家の使用人の性である。
「如何なさいましたか」
「そういやさーお前は？何歳だっけ？」
「存じ上げません」
「え？」
　疑問の声をあげるゴンを、シミズは冷めた目で見やる。
　流星街にゴミとして捨てられたシミズは、年齢も本当の名前も知らなかった。否、名前など最初から付けられていなかったのかもしれない。
　幸せな少年たちを妬む気持ちがない訳では無いが、シミズはまゆひとつ動かさず答えた。
「流星街を知っていますか？」

「ううん」
「俺は知ってるぜ！母さんの故郷！」
「ふふふ、旦那様の一目惚れだったそうですよ」
「うえー親のそういうの聞きたくねー　」
「え？なんで？いいじゃん」
　試験管サトツの後ろではしゃぐ少年ふたりに青年が1人。
「話を戻せシミズ！」
「はい。かしこまりました。ゴン君流星街とはゴミ捨て場です。なぁんでも捨てられる場所です。人間ですらね」
「え…」
　シミズはにこやかに言い放つ。
「たって歩いてたって先輩方に教えていただいたのでおそらく2歳か、3歳より上だったと思いますが本当のところは分からないんですよ」
「へーでいつうちに来たんだ？」
「ふふふ、キキョウ様の嫁入り道具として参りました」
　キルアとシミズは神妙な顔をしているゴンを置き去りにしばらくの間話し込んだ。

とある日１３

「ねえシミズさん」

じっと黙っていたゴンが、不意に二人の雑談にくい込んだ。

「なんでしょう」

「流星街ってどういう所？」

「先程もお話しましたとおり、ゴミ捨て場ですよ」

「そうじゃなくて、シミズさんにとってどういう所」

ゴンは真っ直ぐシミズを見た。シミズは少し考えてから、ゴンに危ないから前を向くように伝え、自分もそれにならった。

「故郷ですよ」

短く答えるシミズに、なら良かったとゴンは笑った。

「では次はゴン君の番ですね」

「！俺の住んでる島はねくじら島っていうんだ！船で遠くから見ると本当にクジラみたいな…」

ゴンの話は、キルアの家の話と掛け合いになりそれは長い地下道の終わりが見えてくるまで続いた。

「俺が先ー！」

「いーや！俺だね！」

霧深い森に少年ふたりの声が響くと、シミズも1歩遅れて地下道を抜けた。

「なーシミズどうだった?!」

「ねーサトツさんどっちが早かった?!」

シミズもサトツも同着だと声を揃えた。

ゾルディック家の使用人のある日オムニバス４

ある日１４

ヌメーレ湿原。俗称を詐欺師の墺とする広大な湿地帯である。

ぬかるむ足元、視界を覆う白い霧、あちこちから聞こえる悲鳴。シミズはそんなものに郷愁を感じていた。

もっとも、流星街の化学スモッグは決して白い霧などという美しいものでは無い。

それでもゴミにぬかるむ足元や、悲鳴には懐かしさを覚えた。

「離れた方がいいな…」

「そうですね、変態の気配がします。やっちゃいましょうか?」

「おまえ地味に短気なのやめろよ」

「短気は損気だってミトさん言ってたよ」

ゴンの言う養母の話を聞く限り彼女も短気なのではなどと思い浮かべながら、シミズは頷く。

「辞めたいのですが、どうにも…まだ死ぬようなことにはなってないですしいいじゃないですか」

「とにかく前に行こうぜ。あいつ、ヒソカってやつ人殺したくてうずうずしてる」
キルアとゴンの様子に微笑まし気な顔をするシミズ。
と、同時にレオリオの叫びが聞こた。
走り出したゴンを止めず、キルアとシミズはサトツの後に続いた。
切なげな顔をするキルアに、寂しいですか。とシミズは声をかけた。
「別にー」
唇を尖らせてサトツを追うべくスピードを上げたキルアに、シミズは音もなく笑った。

ある日15
サトツが足を止めると、そこには倉庫のような建物があった。地を這うような音が響いている。
シミズが挙手し、サトツに発言の許可をとる。
サトツが頷くとシミズは手を下げ、サトツに近づいた。
「ここが第2試験会場でしょうか」
「ええそうです、第一試験合格です」
「ご回答ありがとうございます」

シミズが深々と頭を下げると、サトツは姿を消した。
「なにきいたんだ？」
「はい、第一試験はこれで終了か、と」
「ふーん」
「時にキルア様」
「なんだよ」
「３食お菓子とかやってませんよね？」
キルアは勢いよく顔を逸らした。
しばらくシミズの説教がたんたんと続けられ、キルアが根を上げてしばらく後、半裸で顔を腫らして全身汗にまみれて気絶しているレオリオを担いだ変態もといヒソカが登場した。
「キルア様見てはいけません…！」
キルアの目を塞ぐシミズに、ヒソカの唇は大きく弧を書いた。
「ねぇ、君…」
「それ以上寄るのであれば無視します」
「え？」
ヒソカとキルアの声が被った。

ある日16

「なーシミズー」

「はい、なんでしょうキルア様」

「うぜーんだけど…」

ヒソカがとんでもない顔をして2人を見ている。正確にはシミズのことだけだが。

数分前、シミズに話しかけようとしたヒソカは、音を立てる無線機によってその口を閉じた。

「もしもし……え、あ、そう」

心なししょんぼりとしたヒソカは2人から離れ、しかし食い入るようにシミズを見つめ続けたのだ。

シミズはギタラクルの方へ蝿を数匹送り礼を述べた。

「なーって……めっちゃ見てんじゃん」

「キルア様私には何も見えません」

「寄らなくても無視するのな」

「私の視界にはお仕えする方以外は入りません」

「さっきゴンと喋ってたじゃん」

「知りません独り言です」
「おまえなー」
餌の前の飼い犬のようにウロウロと、視線は飼い主と餌を行ったり来たり。
そのうちにゴンとクラピカがこちらに近づいてきた。
「キルアーシミズさーん！」
「よぉ、よく来れたな」
「うん！レオリオの香水の匂いをたどって…」
ゴンが来たことで諦めたのか、ヒソカはいつの間にかその場を離れていった。

ある日１７

第２試験の１つ目、ブハラなる美食ハンターの指定した豚の丸焼きを完成させ無事通過したシミズは、ヒソカの視線が外れたままであることに、内心胸をなでおろす。どうやらやつのターゲットは試験官に移ったようだ。
雇い主から死ねと言われれば喜んで死ぬが、好んで変態に関わりたくないシミズであった。
そもそもシミズ１人ではヒソカには勝てない。シミズの念能力は暗殺向きだ。１体１の向かい合っての戦いには使用しない。
ヒソカのようなトリッキーなかつ変態的な戦い方には向いていない体技しか取れな

いのである。
「噴霧系だと毒でも死なないそうだし…服毒は時間的猶予があって解毒されてしまうかもしれないな…青酸カリは味が…」
「シミズ？なにぶつくさ言ってんだよ」
「変態をいかに処そうかと…」
「お前まだ言ってんのかよ、そんなんよりスシだよスシ！お前知ってる？」
「存じ上げておりますが…おそらく試験はスシをお出しするだけではダメだと思います」
「え、どうして？シミズさん」
1拍考えたような顔をして、シミズは少し待ってくださいと言い残し第2の試験を言い渡したメンチの前に出た。
「試験官メンチ様、愚かながら質問がございます」
「なによ（地味な顔ねぇ…）」
「私は握り寿司を存じ上げております。この試験の真意は未知のものへの探究心、未知に面した際僅かばかりのヒントで正解を導く力を探るものかと愚考いたします。私の場合ただ形だけ真似た握り寿司をお出しするのは簡単ですが、それでは試験の合格基準にとどかないかと。いかがでしょう。私だけ別の試験をさせて頂くか、全員の試験内容

を私に揃えていただくと言うのは」
「……」
「メンチーだから言ったじゃん。この人の言う通りだってぇ」
「黙ってなさいよブハラ。握り寿司を知らないからって悪あがきの嘘を言ってるかもしれないじゃない」
「でもさー」
「この建物に別室はございますか？」
「あるよ」
「ちょっとブハラ！」
「別室で握らせていただきます」
「ほら、メンチこう言ってるんだから」
「～～～っ」
さも不機嫌そうな顔で押し黙るメンチに、受験生達はみな視線を向ける。メンチとシミズの動向如何では試験内容が変わる可能性があるのだ。
数分睨み合ったのち、メンチはため息を吐いた。
「わかったわよ…その代わり違ったら即不合格よ！」
「はい。それで構いません。今シャリとネタをお持ちしますね」

シミズは一礼すると、お櫃と第1の試練の際くすねていた豚のモツを手にしてメンチの元へ戻った。
「へぇ、ねぇ僕も食べたいなー」
「たんなる素人の奇策で良ければ」
「さっさと行くわよ!ブハラは他の奴らを見てて頂戴!」

ある日18
「それで、試験内容を変えたいんです。ええ、つきましては飛行船の手配を…え?向かってる?あ、ありがとうございます!」
別室から出てきた時には憑き物が落ちたようになっていたメンチは、受験生達に試験内容の変更を通達した。
「なーシミズ何したんだ?」
「握り寿司と得意料理を振る舞いました。まぁ変わり種ではありますが」
女性は共感されたい生き物なんですよ、そう言って含みのある笑いを浮かべるシミズの顔に、げんなりとした顔をしたキルアはその次の瞬間目を丸くする。
空から高齢の男性、ハンター協会会長ネテロが降ってきて、小型のクレーターを地面に作ったからだ。

「最終確認を怠ったワシにも問題はあるが、ちと極端な試験だったのうメンチや…」
殊勝なことを言っているが、ネテロの視線はメンチの胸に釘付けだった。
シミズはそっとキルアの目を塞いだ。
「なんだよシミズ」
「いえ、キルア様の目が汚れるかと思いまして」
「あっそ」
その時ごく一瞬だが、ギタラクルに扮するイルミがサムズアップしていたのに気がついたのは、シミズだけだった。
変に過保護である。
結局マフタツ山なる壮絶な地形のはげ山で、美味なる卵をゲットし、シミズは第２試験も通過することが出来た。

ゾルディック家の使用人のある日オムニバス5

ある日19

第3試験はトリックタワーなる巨大な塔のその上に受験生達は降ろされた。

72時間以内に1階までこい、という事だった。

壁を降りようとするロッククライマーに集う巨顔の怪物鳥に、シミズは別ルートを探そうというキルアに頷いた。

シミズ単体であれば降りることは可能だが、まだキルアに念を見せては行けないと、言い含められていたからだ。

「ねーシミズさん!」

「如何されました?」

ゴンに呼ばれてクラピカ、レオリオがいる場所までついて行くと、なにやら密集した隠し扉がそこにあった。

ほかの受験生が降りていくところを見たらしく、1度潜れば開かなくなると説明を受け、シミズはなるほどと円を伸ばした。どうやらこの下に部屋らしき空間がある。

「丁度5つあるしさ、ここから降りない?」

「ありがとうございます。ではお言葉に甘えて」
「せーので行こうぜ！」
「おし！下で会おうぜ！」
５人が隠し扉を潜り落ちると、同じ空間にいた。恥ずかしそうに笑うゴンたちを他所に、シミズはそこにあった腕輪と説明書きを調べた。
特に爆発物などはないが、念が込められているようだった。しかしはめなければ扉は開かないようで、そうしているうちに４人は腕輪を手首にはめた。
「何してんだシミズ」
「…いえ」
キルアに急かされ、シミズはいやいや腕輪をはめた。すると壁が自動ドアのように開いた。

ある日２０
１試合目、難なくシミズが御し第２戦目の時だった。
蜘蛛の刺青に激昂したクラピカが不意に倒れた。彼を昏倒させたのはシミズだった。
「参った俺の負けだ!!…あり？」
「クラピカは頭に血が登りすぎて気を失ったみたいですが、そちらのマジタニさん今、

参った俺の負けだ〟とおっしゃいましたね。こちらの勝ちでよろしいでしょうか」
「…良いだろう」
そして3戦目のセドカンにゴンが勝利し、ロスタイムなしで余裕を持って通過した。
しばらくシミズに担がれていたクラピカも最後の多数決の時には目を覚ました。
「すまない…」
「いいんですよ。仇が目の前にそれも偽物が現れたら血圧もあがるってものです。それにしてもレオリオさんの処置はなかなかのものでした。お医者さんになれそうですね」
「そ、そうか?」
「ええ」
時間はかかるが全員ゴール出来る道を揃って選び、5人揃って消耗なく第3の試験に合格したのだった。
そして、残り時間に少し眠って過ごすというクラピカとレオリオは壁際に、シミズはゴンとキルアについて壁から少し離れた場所に移動する。
「なーシミズ」
「なんでしょう」
「何使ったの、粉?」
「ふふふ、何のことでしょう」

「シミズ教えろって！」
「私を捕まえられたら教えて差し上げましょう」
「クソーー！」
「え、なになに？」
キルアがシミズに飛びかかると、ゴンも２人を追いかけて走った。

ある日２１

「（念の事はまだ秘密ですからね）ほらキルア様、時間のようですよ」
仰向けに倒れるキルアとゴンにシミズは声をかけた。
「クッソォ！」
「シ、ミズ、さん、早、すぎ…」
「ふふ、ちょっとした裏技ですよほらほら立ってください」
そうして、クラピカとレオリオを伴い５人は飛行船に乗り込んだ。
飛行船で簡単な食事をとると、各々武器の調整や飛行船の探検に出かけた。シミズは体を清めるためシャワーブースに向かったが、生憎使用中だった。
諦めるか、とシミズがその場を離れようとするとドアが開き白い腕がシミズを中へ引

きずりこんだ。
「イルミ様」
「ヒソカに近づけないでねキルア」
「もちろんでございます」
「よろしく」
「交代していただいても?」
「いいよ。今出るからまって」
そうしてイルミはまた針を刺し、顔を操作してギタラクルにするとシャワーブースを後にした。
「さて、出ておいで蛆ちゃんたち…ご飯ですよー」
そうして蛆をグレイトスタンプのモツの入った袋に入れ、シミズは汗を流した。
ある日22
第4試験ゼビル島に受験生達は降り立った。
島、それも無人島であるということはおそらくサバイバルゲームのようなものが始まると当たりをつけたシミズは、飛行船で自然に増えた蝿の卵を各受験生達に仕込んだ。念で強化された卵は指弾となり、しかしその軽さゆえどこに張り付こうが、風が当たったとも思わない。

とはいえそれは念能力者以外の話で、ヒソカには弾かれたが、イルミは分かって受け止めた。

オーラを目に集めて卵を見たイルミはそのままオーラを操作してメッセージを送ってきた。

集めたら寝る。端的に書かれたそれにはい、とシミズも短く答える。

やがてくじ引きが行われ、狩るものと狩られるものが決まった。

シミズは素早く蝿を操作し、目当ての番号を見つけると蝿を蛆まで成長させた。

そしてその番号の受験生が出発した段階で蛆は耳の中に入り蛹となった。

シミズは自分の番が来るまで相手が死んでなければいいな、と思い自分の番を待った。

森の奥、思い切り真っ直ぐ進んで運良く水場にたどり着いたシミズのターゲットは狂ったように耳を掻きむしっていた。

シミズが念で強化した蝿が念も使えない相手に壊せるはずがなく、立派に成長した耳の中の蝿が羽ばたくたびけたたましい羽音がすることだろう。

「うわ、うあああ!!」

耐えきれず、気配をたつどころか叫び出した男にシミズはゆっくり近づいた。

「プレートを頂ければ解放致しますよ?」

「わかった！わかったからこの音を止めてくれぇ！」

画してプレートを手に入れたシミズは、水辺に集う動物や虫を見て暇を潰すのだった。

「試験官さんの視線はむず痒いけどねぇ…本当に手当出るのかなぁ…？まぁ、残り6日間休暇貰ったと思えば…いや、キルア様探そう…変態が近づかないようにするんだった…」

シミズはすっくと立ち上がって木の上に登った。

「あーあゼノ様くらい円が使えれば楽なのになー」

ゾルディック家の使用人のある日オムニバス６

ある日２３

７日間のサバイバルゲームを生き残り飛行船に乗り込んだ受験生達は、ハンター教会会長のネテロとの面接を終え各々好きな時間を過ごしていた。

「シミズさん！」

キルアと試験終了後の帰郷の話を詰めていたシミズに、ゴンが声をかけてきた。

「なんでしょう？」

「シミズさんってヒソカと同じくらい強いの？！」

「…ヒソカなる人物を私は存じ上げておりません。知らない相手と強さを比べるのは難しいと思いませんか？」

「お前それまだ続けてたのかよ…」

「ヒソカはあのピエロみたいな人だよ」

「お前も少しは疑問に思えよ！」

「あぁあの変態ですか」

「ね、どうなの？」

「まぁ正攻法では勝てないでしょうね」
「無視すんなゴラァ！」
「え、そうなの？ヒソカはかなり美味しそうだって言ってたよ！それって強いってことじゃないの？」
「変な言葉を覚えてはなりませんよゴンくん」
「～～ふんっシミズは俺にも負けるもんなー」
「えっそうなの?!」
「ええ、単純な話体術の才能は私にはございませんから」
「じゃあなんでだろう」
ゴンは首を傾げて唸った。
「私は暗殺が得意ですので、それが気になったんじゃないですかね」
「そうかなぁ」
「そうです」
釈然としない表情のままのゴンをのせ、飛行船は最後の試験会場へと飛んでいくのだった。
ある日２４
「殺し屋に友達なんかいらない」

イルミがそう言った時、神妙な顔で頷いているのはシミズただ1人だった。
「おいあんた何頷いてんだよ!キルアの味方じゃねーのかよ!」
レオリオの叫びに、シミズはため息をつく。
「味方ですよ。味方だから言ってるんです。すでに暗殺者として働いてるキルア様が今更シャバに出ても傷つくだけです」
「なっ…」
「シミズ、彼はどこにいるのちょっと殺してくるから」
「お待ちくださいイルミ様。今ゴンくんを殺すとイルミ様が失格となります、ですので私が殺してきましょう。私ならすでに合格致しましたので失格にはなりません」
第4試験でシミズは受験生達に蝿の卵をつけたが、ターゲット以外の卵はまだそのままだった。
故にシミズはゴンの居場所がわかった。せいぜい5mほどのシミズの円だったが、卵が付いている場合はその10倍まで感知できる。ゴンは試験が行われている部屋と同建物内の部屋に運ばれた故にシミズは場所を把握していた。
「シミズ?!」
「キル。お前が俺と戦って、勝って止めないとゴンは死ぬ。友達のためにオレと戦えるかい?」

「できるさ！」
「できないね。なぜならお前は友達なんかより、今この場でオレを倒せるか倒せないかの方が大事だから。そしてもうお前の中で答えはでている。
〝オレの力では兄貴を倒せない〟
〝勝ち目のない敵とは戦うな〟
オレが口をすっぱくして教えたよね？」
「さて、では私はゴンくんの所に」
「やめろよ！やめてくれ」
「キル、動くな。少しでも動いたら戦い開始の合図とみなす。おなじくお前とオレの体が触れた瞬間から戦い開始とする。止める方法は一つだけ…わかるな？
だが、忘れるな。オレと戦わなければ大事なゴンが死ぬことになるよ」
念によるプレッシャーを受けたキルアの怯え様は尋常ではなかったが、シミズはまるで気にとめず部屋を出ようとする。
それをクラピカとレオリオが体を盾に防ぐが、キルア同様念による威圧に怯んだ。
「私は無駄な殺しはしないんですが…必要なら躊躇いませんよお二方」
「んでだよ！ゴンとも楽しそうに話してたじゃねーかよ！なんでそんな殺そうとか思えるんだよ!!」

「貴方に情はないのか！」
　プレッシャー負けず、しかし震える声で叫ばれたそれはシミズになんの感動も与えなかった。
「仕事に差し障るからです。それ以下でも以上でもありません。仕方ありませんね…あなた達も殺しましょう」
　シミズの手が2人に迫り、イルミの手は今まさにキルアに触れようとしていた。
「まいった、おれの、負けだよ」

　ある日25
「キルアに謝れ!!」
　ハンター試験終了後の説明会の途中、骨折した腕を釣ったゴンが、イルミに詰め寄った。
　イルミの腕を掴み、ゴンが捲したてる。
「…まるでキルが誘拐でもされた様な口ぶりだな。あいつは自分の足でここを出ていったんだよ」
　ゴンに掴まれたイルミの腕がミシミシと音を立て、まさに折れんとしていた。しかしそれはシミズに防がれた。

「シミズさん?!」
「ゴンくん、私の雇い主のご子息に何をなさるので?」
「シミズ」
「は、出しゃばりました、申し訳ございません。しかし貴方に傷をつけるのは許されておりませんので」
「いいよ、このくらい親父とやってたらしょっちゅうでしょ」
「こいつは旦那様とは違います」
「離してよシミズさん!」
「イルミ様に狼藉をはたらかないのであれば放します」
「あのーそういうの終わった後にお願いします」
マーメンの一言に、シミズはにこりとわざとらしく笑った。
「あぁ、申し訳ございません。さ、ゴンくん座りましょうね」
そう言ってゴンの腕を掴みあげたシミズは暴れるゴンの口を抑え着席した。

ある日26
「まぁいっか、教えたところでどうせたどりつけないし。キルは自宅に戻っているはずだ、ククルーマウンテン。そこにオレ達一族の棲み家がある」

ゴンに、そう言ってイルミは背中を向けた。
「イルミ様、私はゆっくり戻ってもよろしいでしょうか?」
「いいよ。報酬も上げるように母さんに言っておくし。1週間後に別の仕事あるからそれまでに帰ってきて」
「有り難き幸せ」
シミズはイルミと別れ、飛行船の予約を取った。
そして飛行船に乗りこむとそこにはゴン達がいた。
「シミズさん」
「おや、本当に行くの」
「行くよ!キルアを取り戻しに!」
「まぁ、頑張って…正直な話キルア様に友達の1人や2人いてもいいと思うんだけどねぇ?」
そんなことを呟くシミズに、ゴンは詰め寄った。
「じゃあなんで?!」
「俺個人の感情と仕事の内容は違うってだけだよー」
「…性格が違わないか…?」
「あ、あぁ、なんで急にこんな緩いんだ?まさか解離性障害があるんじゃねーだろうな

？」
「失礼だねそこ2人。俺は休暇にまで気を張りたくないだけ」
「休暇…」
「そう。あ、着くまで暇だしなんでも聞いていーよ？コンプライアンス的にやばいのは答えないけど」
「キルアの家はどこ」
「えーそれはイルミ様言ってたでしょ。ククルーマウンテンって」
「それは分かってる！でも家の場所は」
「頭悪いのかなー？」
「ふぐっ?!」
ゴンと共にゴンの言葉に頷いていたレオリオも何かを堪えるように呻いた。
「言葉のままだよ。ククルーマウンテン自体がキルア様のご実家。山ぜーんぶ」
「はぁあ?!や、山丸ごとか?!」
レオリオが叫び、ゴンも目を丸くした。
「暗殺はリスクの高い分儲かるしねー、麓の町から観光バスもでてて門までは簡単に行けるよ、入れないだろうけど」
「観光バス…」

レオリオが眉を顰めて呟く。
「入れないってなんで？」
「うーんとねー、暗殺者の家なのよ」
「それは知ってるよ」
「でも理解出来てないみたいだね」
「ど、どういう事だよ」
「…襲撃者に備えているのか」
「ごめーさつークラピカ君は頭いいねー」
「怒る気も失せるな…」
「そういう訳でね、入るためには力試しがあるのさーゴン君みたいに頭も体も弱い子を友達にして、お家に出入りされちゃうとゴンくん利用して家入ってきて、君を助けるためにキルア様が死んじゃうかもしれないでしょーだからゾルディック家は強くないと入れないようにしてあるんだよ」
「そんなのおかしいよ！」
「おかしくないよー君がキルア様の為に自爆できるならともかくそんな覚悟ないでしょー？」
肩を竦めて言うシミズに、跳ねるようにゴンが顔を上げた。

「そんなこと」
「あるよーそれに、覚悟があっても君弱いから意識奪えば簡単に人質に出来るからねぇ。なんなら君そっくりに整形したりしてね。そうしてまでゾルディック家の人間を狩る価値はあるのよ。だからねゴン君強くなってキルア様と遊んであげてよ」
「えっ反対じゃないの？」
「さっきもいったけど居てもいいとは思うんだよ、同年代のお友達。イルミ様にもいるし…イルミ様はお認めにならないけども」
シミズは変態を思い浮かべて苦い顔をした。

ある日27
観光バスに揺られ、シミズ、ゴン、クラピカ、レオリオの4人はククルーマウンテンのゾルディック家正面門まで来ていた。
彼ら4人の他は掃除夫のゼブロだけだった。
「お疲れ様ですシミズくん」
「お疲れ様です。彼らはキルア様の友人と名乗る方々ですが、通さなくて結構です。彼らが自力で本家に来られるのであればゼブロさんにお咎めはないよう、奥様にお伝え致します。」

「そうですか…ありがとうございます」
「ちょ、ちょっと待てよ、シミズよ、お前が取り次いでくれれば良いじゃねーか！」
「ダメです。私にそのような権限はございません。」
「門に鍵はかかっておりませんので、お好きなように」
「えっ」
　一見巨大な壁のような、信じられない大きさの扉はキシキシと軋みながら、4と書かれた部分まで開いた。
「但し、見つけ次第排除致しますので悪しからず」

ゾルディック家の使用人のある日オムニバス7

ある日28

シミズは疲れていた。

「てめぇ…なに主人より後に帰ってきてんだよ」

「私のご主人様はキキョウさまだけです」

シャツの胸倉をつかみあげるゴトーに、シミズは相変わらずの無表情でそう答えた。

執事・使用人用の建物で、ハンター試験から帰って早々シミズはゴトーに呼び止められこの状態である。

「離して頂けませんか。このままでは業務に差し支えます」

盛大な舌打ちと共に開放されたシミズはシャツのシワを伸ばすように整えると、ハンター証を見せて仕事の後休暇を貰ったことを伝える。

「余計なものまで連れてきやがって」

「彼らなら、と思いまして」

「……奥様に反するつもりか」

「とんでもございません。ゴンくんは純粋ゆえ、暗殺者として成る可能性がございます。

そうでなくともあのジン＝フリークスの息子となれば」
「大器かもしれねぇ、と？」
「左様でございます。彼は化けますよ仲良くしとけば安泰安泰」
「フン」
「あと、クルタの生き残りと医者志望の青年。彼らも悪くないと思います。ただ、クルタの方は頭がいいんですが幻影旅団を仇としてるのであまりオススメしません。彼が旅団員全員殺して片が着いた後ならとは思いますが、まず無理でしょう。医者志望の彼は少々情に流されるきらいがありますのですが、単純で扱いやすいですよ。それに治すという職業を選ぶ点について考えるとおもしろい念能力を作りそうなので」
「確かに…医者、とくりゃ除念か回復か、何れにしても悪くないな。ものになりそうなら繋いでおけ」
「承知致しました。ホームコードは頂いておりますので今後使えそうならキープしておきます」
「お前にしては上出来」
「ふふ、ありがとうございます。さて、私は休んだ分のシーツの山を片付けますかね」
シミズはそう言ってランドリールームへ消えた。

ある日２９

「は？」

「キルアを追ってと言っているのよ!!」

甲高いゾルディック家の奥様の声に、シミズは思わず聞き返していた。

再度喚き散らしたその声にようやく飲み込んだシミズはため息もついでに飲み込んで深々と頭を下げた。

「しかし、旦那様のご意向を無視するのは得策ではないかと」

「じゃあ解雇よ」

「行ってまいります」

「貴方はキルアが戻るまでは解雇って事にするわ。安心して。お給料は私からあなたの口座に振り込むから」

「…は、御心のままに（結局解雇状態だぁ…）」

実に鮮やかな手のひら返しにキキョウは満足そうに笑った。

ある日３０

「貴方がここを出る時は骨になっていると思っていましたが残念です」

柔らかい表情で言うゴトーに対し、シミズは今にも倒れそうな顔を晒している。

「あ、あの、シミズさん。そう気を落とさず…」

「いいんだよカナリアちゃん…奥様は又きっと俺を呼んでくれるはずだから…」
「体のいい厄介払いに1億ジェニーかけてもいいですよ」
「うるせーゴトーのバーカバーカ！いいもんね！キルア様のお写真ゴトーには絶対送らねーから!!」
「ふん、奥様は頼まずとも共有なさる」
「クソーーー！おぼえてろよー！」
　シミズは紙幣を小さなリュックに入るだけ詰めてその場を辞した。
「なぜシミズさんにはそのような対応なのでしょうか」
「余計なことを言う暇があればあいつが抜けた穴を埋めろ」
　ゴトーが指さした先にはシミズの担当していたランドリールームがあった。カナリアが開けるとドアから溢れ出しそうな量の布。
「こ、この量…」
「人手不足なのは知っているな？」
「は、はいっ！」
「あいつはこの量を回収、洗濯から畳んで各部屋へ片付けるまで半日かからない。真似しろとは言わないから一日で半分は片付けろ。いいな」
「っは、はい…」

カナリアの体の５０倍は優に超える洗濯物を前に、彼女は冷や汗を流した。
「戻ってきてくださいシミズさぁん…」
その日、日付が変わる直前にシミズの仕事の半分プラス自分の仕事、毎日の鍛錬を終わらせたカナリアは、着替えもせずベッドに沈みこんだ。

ある日３１
カナリアの叫びも流石にククルーマウンテンの麓の街までは届かず、シミズは飛行船までの道のりを走っていた。
「（キルア様の予約した時間まであと5分…）」
猛スピードで走るシミズを視認できる人間は麓の街にはほぼおらず、生じた風に首を傾げるばかりだった。
「おっと乗りまーす！」
飛行船に乗り込むための階段を仕舞おうとしている男性にシミズは叫んだ。
「チケットは」
「はいこれ」
シミズが携帯電話の画面を見せると、男はどうぞすぐ出発します、と言ってシミズを通した。

「ありがとうございます」
　飛行船の船内はさほど大きくなく、直ぐにキルアを見つけたシミズは音もなく近づいた。
「キルア様ー俺解雇されたからー連れてってくださーい」
「はぁ?!」

　ある日３２
「お前がこんなに緩いやつだったとは…」
「そりゃー仕事中は猫くらい被りますよー!」
「ねこ…」
　キルアとゴンの２人に挟まれ、シミズはさめざめと泣いていた。
「奥様ったら酷いんですよ!キルア様を直ぐに連れ戻さなかったから職務怠慢だって!その時俺あなたのご長男のめーれーでハンターー試験合格しろって言われたてたのにぃ!どっちもとか無理ゲーですしぃ!」
「わーったわーった喚くなよ…」
「シミズさんも一緒に天空闘技場いく?」
「いいのぉゴンくぅん!!ありがとおおおお!」

「お前…」
「さぁさぁ天空闘技場に着くまではしばらくありますし、不詳シミズがご飯奢ります！」
「いいの！ありがとうシミズさん！」
「チョコロボ君も買えよな！（搾るだけ搾ってどっかに置いてこー）」

ゾルディック家の使用人のある日オムニバス８

ある日３３

「ここが天空闘技場かぁ！」
「高いですねぇ相変わらず」
「まぁな、って言っても高さだけならうちの方が高いけど」
「来たことあるの？」
雲より高い天空闘技場を仰ぎみる少年ふたりと男が１人。わずか６歳の時にこのタワーを登ったというキルアに驚くゴン、シミズは職務中の無表情はどこへやら、表情豊かに天空闘技場のシステムを掻い摘んで注釈していた。
「さ、受付しにいこーぜ」
「うんっ！」
「久しぶりにやりますかぁ～」
受付所にならぶ列の最後尾につき、３人はまた雑談混じりに進むのを待った。
「おいおい子供連れかよ」
「舐めてやがるな」

そんな言葉がコソコソと囁かれているが、欠片も気にした様子なく、シミズはニコニコと少年ふたりの掛け合いを見ていた。

そして、受付を終えた3人は番号を呼ばれると壇上に上がる。

「おいおいおっさん、無理すんなよ怪我するぜ?」

チンピラが向かい合ったシミズを挑発するように笑っているが、シミズは歯牙にもかけず審判の開始の合図を待っている。

「始めっ!」

勝負にすらならない一方的なビンタがチンピラの頬を往復した。しかしチンピラにダメージは無かった。

「へ、へへっ!早いだけかよ」

シミズは無言でチンピラの言葉を流すと、また彼の頬をビンタした。

「うっぐふっ」

どうやら今度は痛みを感じる程度のようで、ビンタの往復が終わるとチンピラはたたらを踏んだ。

「て、てめぇ!」

「手加減しすぎたかぁ…意外と丈夫だなー殺しちゃダメって手加減難しいんだよねー」

手を握ったり開いたり繰り返し、確かめるようにシミズが呟いている。それを隙だと

思ったのか、チンピラはシミズにつかみかかった。
「ほげらっ」
次の瞬間、激しく頬を殴打されたチンピラは空を舞い、壁へとめり込んだ。
「死んでない死んでない良かったー」
殴打と同時にチンピラに忍ばせた蝿から彼の心音を聞き取り、ルールに反していないことを喜んだシミズに審判が近づき次の試合が行われる階を伝えた。
「貴方は前に１９０階まで到達されていますね。…うん、１００階にお進み下さい」
何やら操作した器械からシミズの過去の戦績を見たのか、審判はそう言って紙を手渡した。
「うわー、ありがとうございます！」
ある日３４
「あ？お前１００階？」
「わぁ！すごいねシミズさん」
「ふふふ、そうでーす。宿の金が浮きましたぁーお先に失礼致しまーす」
キルア達と合流し、エレベーターに乗り込んだシミズは言い渡された数字を伝えぺこりと頭を下げた。
「協調性のねーやつ…まぁいいや、後で部屋教えろよ、泊まってやるから」

「お待ちしてますよーぉー」
「５０階でーす」
　５０階につくと、キルアとゴンはシミズに手を振りながら降りていく。
「シミズさんまた後でねーー！」
「部屋番送れよ」
「はい、また後ほど」
　いっそわざとらしいほどの笑顔で手を振り返すシミズは、内心疲れていた。
「（写真、動画コーナーを買収してキルア様グッズの販売を止めなければ…まかり間違って売られた場合俺が殺される…それから蝿ちゃんにつけたミルキ様特製超小型カメラからの映像を編集、ハイライトをＡ２で高解像度現像して紫外線保護フィルム付きパネルを…）」
　シミズが与えられた個室に腰を据えた頃、５０階ではキルアとズシの試合が始まっており、キルアを追うように操作した蝿達が入れ代わり立ち代わりでシミズの元へやってくる。
「あーなるほどズシって子、念が使えるんだ…一瞬すぎて気が付かなかったや…鈍ってるなーうん、別に見つかってもいいけどぶつからないようにしとこう」
　シミズはハエたちを陰状態にすると、素早くキーボードを叩き編集ソフトを起動し

た。ハードにイヤホンを装着すると映像を再生し編集を始めた。
「ふんふふーん…」
長引くキルアとズシの試合を鼻歌交じりで観戦しながら編集するシミズは完全に油断していた。
ズシ!!
甲高い電子音とともに、その声はシミズの鼓膜を破らんと響いた。
「っ、あっクソっ蝿ちゃん達!!」
音波に直に晒された蝿たちは逃げ惑い失神する個体もいた。
「こいつ許さん!!」

ある日３５
「シミズは知ってるか」
「は、何を、でしょうか」
随分と長引いた試合の後、ゴンとキルアはシミズが割り当てられた個室に来ていた。
「ネンだよネン！」
「ネンですか…うーん。少し待っててください」
部屋から出て共有スペースの電話ボックスに入り携帯電話を取り出すと短縮１番で

コールするシミズ。それはゾルディック家の長男へと繋がった。

▩なに？▩

「キルア様の例の技術の習得につきまして質問がございます。旦那様にお取次ぎいただけますでしょうか」

▩対価は▩

「言い値で構いません」

▩場所は▩

「ジャポン」

シミズとイルミの掛け合いがしばらく続くと、唐突に受話器の向こうの人物が変わる。

▩キキョウの我儘に付き合わせてすまんな▩

「とんでもありません。私はキキョウ様の物ですから」

▩それで、念の事だったな。そろそろ覚えさせてもいいだろう。采配は任せる▩

「かしこまりましたお任せ下さい」

部屋に戻るとイラついた表情のキルアがいた。

「お待たせしましたー」

「ううんそんなに待ってないよ」

「いーや待ったね！」
「はいはい、念についてお話致しましょう」

ある日36

「なーシミズー」
「はい、なんでしょう」
「お前の念能力(はつ)ってなに？」

シミズの部屋でシミズを先生にオーラを感じるための瞑想をしていたゴンとキルア。

「お教えできません。私は弱いですので情報を秘匿していかないとすぐ死にますから」
「ちぇー」
「ヒント！ヒントだけでも教えて！」
「んんー弱いなりに頑張りました？」

全く参考にならないと、瞑想もそこそこにキルアは飲み物を買ってくると言い残し部屋を出ていった。

「シミズさんは念の事知ってて、瞑想も必要だから教えてくれてるんだよね？」

ゴンはついて行かないのか、この授業法に嫌気がささないのかとシミズが聞いて返ってきたのはこうだった。

「そうだよ？」

「シミズさんが嘘を言ってないのは何となくわかるよ。でも弱いなりに、はなんだか違うような気がするんだ」
「そう？まぁ、でもゴンくんは騙されやすいしカンも大事だけど経験も積んでいこうね」
「押忍！」
「ふふふ、例のズシ君の」
「えへへーうつっちゃって」
「彼の先生ともお話したんでしょう？」
「うん！念のことを知りたくて聞いたんだけど、念じゃなくて燃、燃えるって意味のしか教えてくれなかったんだ」
「前に言ったけど考え方としては同じだし間違ってるわけじゃないんだよ。でもケチだよねーどうせできる人はそのうちできるようになるしさー」
「（シミズさんウィングさんのことあんまし好きじゃないのかな）」
「だいたいあのメガネダサすぎだしシャツの裾いっつも出てるし言うこと硬いし絶対強化系ですよ！」
「え、関係あるの？（嫌いな割によく見てるなぁ）」
「イルミ様のご友人が勝手に作った念の系統別正確診断だそうです。結構あってるのでつい…」

「そうなんだぁ」

ある日３７

「やあ」

「おや、こんな所で会うなんて運命だなぁ蠅くん…俺の子にならない？」

「無視は良くないよシミズ」

「あ、あっちには銀蠅くんが！」

一瞥もくれず完璧に無視を決め込むシミズに、新しい扉を開きそうなヒソカがついてまわる。

その光景を天空闘技場の参加者たちが奇異の目で見る。当たり前である。

ここ天空闘技場において２００階の選手はよく取り上げられる有名人だからだ。それに加え、奇行を行う２人に視線は集まった。

「返事してくれないと泣いちゃうよボク」

「それも面白そうですね変態」

オーラのプレッシャーがうっとおしくなったシミズはさも嫌そうに振り向いた。

「やっとこっち向いてくれた。ねぇ、君はいつ２００階に来る？」

「いや貴方そろそろカンストでしょう？」

「君さえ良ければ今ここでヤってもいいよ」
「嫌です無理です一昨日来やがれ変態奇術師死ねよ」
「そうかい？じゃあここでヤろうか」
「やらないって言ってるのにクソかよ変態」
しばらくの攻防の後、ヒソカのオーラを掻い潜った蝿の1匹がヒソカの首をとらえたことで終わった。
蝿の這っている部分のオーラが乱れ、そこにシミズの手刀が当てられる。
「今死ぬか、主の役に立って死ぬか選べ変態」
「君も大概だよね。いいよ、萎えちゃったし君の好きな方で」
「じゃせいぜい主の役に立ってくださいね」
「はぁい。ところでこれはとってくれないのかい？」
「オーラで簡単に飛ばせますよ？」
「…いいのかいそんな簡単に教えて」
ヒソカはオーラで蝿を弾き飛ばすと、貼り付けたような笑みでシミズに問うた。
「別にこれくらい戦ったら秒で分かることですし構いませんよ。貴方が本気なら私は今頃ミンチですし。それじゃ、私には二度と顔見せないでくださいね」

ゾルディック家の使用人のある日オムニバス９

ある日３２

シミズは走っていた。

幼い足でゴミの山をとにかく走っていた。

意味は無い。ただ走らなければ何かが終わるような気がしてただただゴミを踏み締め、肉が裂けようと走った。

ここは流星街。人すら廃棄される場所。

齢恐らく５歳にも満たないだろう少年は耳に齧った「シミズ」という言葉を自分の名前とし、年頃の割に大人びた様子で流星街の仲間たちと交流していた。

「はぁっはぁっ、っう」

しかしその日はいつもと違った。いつものように、いつもの得体の知れない恐怖に、シミズは呻きながら走っていた。しかしいつもと違い、走り着いた先には美しいシルエットがあった。

「それがゾルディック家に嫁ぐ前の麗しきキキョウ様でした」

うっとりとしか言えない声で無表情の中に喜色をまぜ、シミズは惚気けた。もちろん

キキョウの夫であるシルバとは違う意味でだが。
「長い」
ゴトーはシミズの頭を叩き、その上頭から紅茶をぶちまけた。シミズは顔色ひとつ変えずにそのまま叩かれ紅茶を被った。
「シ、シミズさん、またトリップしてる」
「こうはなるなよ」

ある日３３
ここは天空闘技場。一対一で戦い、勝ち上がる度に賞金額が増えるという。その試合の勝敗に金銭を賭ける娯楽施設である。
「やあお姉さん」
「シミズ選手、登録はお済みですし他のお客様の迷惑になりますので、せめて横にずれていただけますか」
「あぁ、やっぱり君の瞳は美しい」
「はぁ、そうですか」
「天空闘技場から見える夜景が霞むくらいにね」
「ははは」

「あぁ、横から見ても前から見ても」
「おかえり願いますー」
上記全てシミズは無表情で述べている。
苦笑いする２００回受付の女性は苦笑いのまま退出を促しますが、シミズはなおも女性を口説きます。
無表情で。
（ハエちゃん達に食べられるさまはさぞかし美しいんだろうなぁ……角膜を拭うように食べ、隙間からはウジちゃんが水晶体を回り込んで……）
恍惚とした脳内とは違い、無表情でシミズは受付の女性を誘う。乗らぬが吉である。

ある日３４
「という訳で、諸説様々ありますが発に関しては全く同じものはないと考えてください。効果が似たようなものはありますがそれでも初見の気持ちでいてください。見たことがあると油断していては対応できなくなりますから。似たような効果の発でも、発動条件が厄介なものほど当たれば威力は桁外れになりますしね」
「へーー！」

「まぁ、その人の性格でどんな能力か凡そ分かりますし、仮に自分に合わない系統を習得してる人間がいたら正直その系統1本で同程度鍛えてる人にはまず勝てません。とにかく修練あるのみですよお二人共」

「オス！」

「と発について御託を並べて来ましたが、自動的に発が決まってしまって最初自分でも能力がわからなかったマヌケが一定数いるのも事実」

「自動的に？」

シミズひとつ頷くとオーラで空中に板書し始めた。

「発はそれまでの経験から成り立っていると言えます。だからこそ、その人間の癖などを観察することで大凡の察しが…」

シミズが不自然に言葉を止めたのをゴンとキルアの2人は不思議そうにみやった。

「シミズ？」

「申し訳ございません、キルア様。仕事が入りました。戻らなければ先日の通り、試合を申し込まずに棄権して下さい」

キルアの呼び掛けに視線を向け、申し訳なさそうにシミズは言葉を紡いだ。それに鷹揚に頷いて腰を上げたキルアと次いでゴンもつられるように立ち上がる。

「シミズさん、俺は？」

元気に手を上げて言うゴンに、シミズはわずかに目を細めて人差し指を彼に向って突き出した。
「凝を教えましたね」
「う、うん」
「今しましたか」
していない、とゴンが首を振ると真似るようにキルアがゆるく首を振った。
「危機感なさ過ぎ。シミズが敵にならないとは限らないんだぜ?」
「で、でもさ…っだぁ!」
鋭いデコピンがゴンのおでこを強襲する。
「殺気なんて出す暗殺者は二流です。私はゴンくんの親でも友達でもありません。信じるモノはちゃんと見極めなければなりませんよ。でなければキルア様のそばにおいてはおけません」
吐き捨てて清水は窓から飛び降りた。

ゾルディック家の使用人のある最後

ある日35

「シミズ」

「はい、シルバ様」

いつものように操作したハエ達で事後処理をするシミズ。シルバはそれを見ることなくその場を後にすることが多いのだが、この日はそのさまを見ていた。

「これは生きた人間は食わせんのか」

「死肉が好きな子達ですので…念で強化してもせいぜい新鮮な死肉を食める程度です。生きている人間は念使いでなくとも僅かながらオーラをまとっておりますゆえ。ただ、生きている人間でも組織が死んでいれば可能です。生きながらも腐っている人間は捕食対象です」

「ふむ」

シルバは数瞬考えをめぐらせると、どこかへ電話をかけ始めた。

「ミルキ、試作してもらいたいものがあるのだが」

シミズは主人の伴侶の声を聞きながら、ハエたちの食事を見守る。そして、シルバが

電話をしまうのを見計らって話しかける。
「生ける屍人の粉薬ですか」
「あぁ、液体化をキキョウに、ターゲットに薬を打ち込む手段をミルキに依頼した。意味はわかるな」
「ご期待に添えるよう精進致します」
やや大仰な身振りで頭を垂れるシミズに、シルバは下がれと手をふる。既に場は血飛沫のひとつもなく整っていた。
生ける屍人の粉薬とは、アンダーグラウンドで出回っている粗悪なドラッグのことである。
強い気分の高揚、全能感を感じる。しかし、1度人体に入れば禁断症状が始まり、際限なくそれを求め果ては生きながら血肉が腐っていくことでも有名なドラッグである。
「厄介な依頼にはもってこいだな」
シミズが出ていった扉に目を向けて、殺人一家の現家長は口端で笑んだ。
※某魔法学校の薬とは全く関係ありません。お解りの方も多いかと存じますが、どちらかと言うと某ワニさんお薬イメージです。

ある日36

ハンター試験第二試験の内容が途中で変更され、受験者達はハンター教会の飛行船に乗りマフタツ山まで来ていた。
「クモワシの卵かぁ」
「食わねぇならくれよシミズ」
「あぁ申し訳ございません。キルア様に食べかけを差し上げるなど恐れ多いことでございます」
これみよがしに卵にかじりつくシミズ。
「チッ」
舌打ちしたキルアは苛立ちを隠さずシミズの足を何度も蹴りつけた。

最後の日

実に、空の高い日だった。
あるいはシミズ自身が空から遠ざかるように地に伏したからかもしれない。
なんてことの無い日だった。
キキョウの命令によりゴンとキルアについて、クジラ島にやってきていた時の話だ。

森に行くという2人に、送り出したシミズはこれ幸いとごんの叔母であるミトに質問攻めにされた。

外の空気を吸いたいと外に出て、念の基本を修めたキルアに気付かれないよう陰を施したハエからの受信で、ベストショットの予感を感じたからかもしれない。

暗い森の中歩を進めるシミズは後ろの気配に気が付いた。

気がついてなお警戒などしていなかった。気配の大きさ強さからせいぜい熊程の大きさの野生動物であると当たりをつけたからだ。

念を覚えている清水にとって野生動物の牙程度嬰児のアマガミのごとくだった。

「ちゃんとお魚も食べられるようになって……！」

キルアに気取られないように2人からほど近い場所で気配を殺すシミズ。

シミズは後ろ気配を気にしていなかった。それが間違いだった。

もうすぐ夜が開けるじかんだった。

髪をなびかせる程度の風がシミズの後ろからふいた。

「っ?!」

シミズの口にキツネグマの体毛が吸い込まれる。

数瞬後シミズの体に異変が起こる。アナフィラキシーショックである。

シミズは知らなかったが、彼はキツネグマアレルギーだった。

シミズのいた流星街では同じく捨てられたゴミを食うことも多かった。
密猟者は剥製にしたのち不要な内蔵を流星街捨てたのだろう。内蔵についた毛すら空腹に押され口に入れたシミズは知らぬ間にキツネグマアレルギーになっていた。
そして、ゾルディック家にて様々な毒物に体を慣らしてなお、ある意味都会暮らしであるシミズはこれまでキツネグマに遭遇した事がなかった。
医者の場所もしれずたどり着けたとしてもこんな離島でアドレナリン注射を備えてるとも限らない。
そしてその時は来た。
いくら数分息を止めることが可能なシミズであっても既にその数分を過ぎた。
ストローで息を吸うよりも細い息を終えたシミズは意識を暗闇に落としていった。
あの日ごみ溜めの街で見た美しい神様を脳裏に描いて。

とある使用人の没集

※こちらのページにあるものは全て没になった文字列です。尻切れ蜻蛉は本編として書き散らしたものと同様ですが、ものによっては5行くらいで終わってたりします。セリフだけだったり変態的すぎたり。唐突に腐っていたり腐らせたりしたり本文以上にキャラ改変がひどいです。
でもチラ裏だからこそあえて晒しておきます。
勇気のある方はどうぞご覧下さい。

あったかもしれない日

「ゴン君、裏ハンター試験合格です」
キルアとともに２００階にたどり着いたゴンは、待ち構えていたウィングにそう告げられた。
「どういうこと?ウィングさん」
「念の習得がハンターの必須事項なんですよゴンくん」

「シミズさん！」
「ですよねウィングさん？」
　一足遅れてエレベーターから降りてきたシミズは陰険なオーラをウィングに当てながら無表情に首を傾げた。余波に当たってキルアが場を退き、ゴンも冷や汗を流しシミズから視線を離せない。生半可な練度では相殺しきれないおぞましいオーラだった。
「ええ、そうですよシミズさん」
「おや、私をご存知とは恐縮です」
「初戦以降張り手１発で２００階まで進んだあなたを知らないものはここ天空闘技場には居ないでしょう。というのは建前で、」
「私もキルア様とゴンくんからお噂はかねがねお聞きしております」
「…貴方は念習得済みですから特に話はございません」
　シミズからの禍々しいオーラの放出は実に器用にウィングのみに向けられていく。

――――――

「え？」
「聞こえなかったのか？」
「いや、ウボォーギンが死んだんでしょ？」

「パクもだ」
「……」
「やめろ、無言でハエを飛ばすな」
「何たる失態……やっぱり幻影旅団なんてろくなもんじゃねぇ。早く口説き落とすんだった……。ていうかそう言えばいつもの愉快な仲間たちは？」
「あー……」

どこからか怪鳥の声が聞こえる。
シミズはあたりを見回しながら森の中を突き進む。
プレートを手に入れてなお無駄な労働をするつもりは彼にはなかったが、拠点を構えなければならない。
途中不自然な土の盛り上がりを発見し、身に覚えのあるオーラにほんの少しばかり鼻の頭にしわを寄せたシミズはそれでも無表情といえるその顔をそらして
ーーーーー
「や、やめろ……♡」

「やめて欲しいならそういう顔をしろ♡」
「わかってるんだろゴトー♡」
「なんの事だか♡」

「あの、このゴトーさんとシミズさんに似たキャラはなんで語尾にハートついてるんですか？」
「薄い本を厚くした結果よ。でもその先はあなたには早いわ！そっと閉じてお返しなさい！」
「は、はぁ……？」
「イルキルに続き意外とファンが多いのよね。さぁ！このゴトー×シミズ完全版１００万ジェニーからよ！」
机が力強く叩かれていた時、２人の背筋に怖気が走ったとか。走っていないとか。

ーーーーー

良くぞここまでお読み頂きありがとうございます。
以上でとある使用人の１日の更新は終了にございます。
没集と言うほど数がなく、作りこんだ作品では無いというのは明らかな文章ではござ

いましたがお読み頂き誠にありがとうございました。